第826号 平成26年3月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日　第三種郵便物認可

2014年（平成26年）
3月号（No. 826）
公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部　150円
会員の会報購読料は年会費に含まれています
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

助成を受け、ファミリー登山普及を目指す

ウェブサイト「親子で楽しむ山登り」を開発

家族登山普及ワーキンググループ　永田弘太郎

「子どもゆめ基金」による助成を受けスタートした「親子で楽しむ山登り」。長期的視野に立って進めている目的などを、担当グループから報告いただいた。

●目的は、子どもを山へ

2月、当会のホームページに「親子で楽しむ山登り」という、サイト（ページ）が加わりました。タイトルは親子ですが、親と子だけでなく、孫との登山なども含めたファミリー登山を対象としたサイトです。

このサイトを作った目的は「子どもの登山」のバックアップにあります。多くの子どもたちに、山に接し、山登りをしてほしいと考えたからです、子どもたちにとって、登山活動は大自然に直接接するだけではなく、生命や自然への関わりを自覚し、文化や歴史などを具体的に考える機会を与えます。また、社会性や人間性の形成、加えて健康や体力を育成する働きがあります。

当会としては、会員予備軍としての期待ができ、ファミリー登山の普及や登山教室の拡大を促すことで、支部の活性化と公益活動の向上にもつながると考えました。

次の3点を軸に、ホームページを作成しました。

①子どもが山登りを好きになるための、山の知識や技術を、楽しく興味深く伝える。

②親や指導者が、子どもを山に連れて行くための、知識や技術を伝える。

③山を中心に、日本列島の自然の素晴らしさ、文化や歴史の豊かさを伝える。

ですが、理想や意欲だけでは、目的は達することができません。実現できたのは助成のおかげでした。

●「子どもゆめ基金」の助成

本サイトを作ることになった誘因は、独立行政法人国立青少年教育振興機構が行なう「子どもゆめ基金」という助成の存在でした。そこでは「子どもの体験活動」「子どもの読書活動」「子ども向け教材開発・普及」という3種類の活動に対し助成を行なっていました。最初の体験活動というのは、登山教室や理科教室などの体験活動に対して、二番目は読書活動に対しての助成です。私たちが選んだのは、「子ども向け教材開発・普及」という「インターネット等で使用可能なデジタル教材を開発し普及する活動」に対しての助成です。

文部科学省の教育目的とするところの「子どもたちの〈生きる力〉を育む」こととも合致しており、「豊かな心や健やかな体を育成する」ことでもありました。

ただ、「子どもゆめ基金」の平成25年度募集の存在を知ったときにはすでに募集期限が迫っており、計画を立て、書類を作り、理事会の承認を得るまで、あわただしい

目　次

助成を受け、ファミリー登山普及を目指す‥ 1
アウトライアー東峰　初登頂を振り返る‥ 4
札幌周辺の山小屋‥‥‥‥‥‥ 6
UIAA（国際山岳連盟）元会長
イアン・マクノート・デーヴィスさん逝去‥ 8
13年秋のメラ・ピーク登山 ‥‥ 9
東西南北‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 10
　山に遊び、酒をたしなみ五十年
　故早川瑠璃子永年会員の山岳図書が届く
　今年も雨の中の慰霊と安全祈願
活動報告‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 12
　集会委員会
支部だより‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 13
　東九州支部／埼玉支部
図書紹介‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 14
図書受入報告‥‥‥‥‥‥‥‥ 15
会務報告‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 17
ルーム日誌‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 18
新入会員‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 18
会員異動‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 18
INFORMATION ‥‥‥‥‥‥ 19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月・火・木‥‥‥‥‥‥‥10～20時
水・金‥‥‥‥‥‥‥‥‥13～20時
第2、第4土曜日‥‥‥‥‥閉室
第1、第3、第5土曜日‥‥10～18時

作業が続きました。私としても官公庁への提出書類を作ることは初めての経験で、また、ファミリー登山に関しても詳しくはありませんでしたから、多くの人に助けていただきました。11月16日、助成金額の最高限度額である一千万円にほど近い金額での提出でした。

一次審査の結果が報告されたのは、年次晩餐会も終了した12月中旬になってからでした。

二次審査は2月18日に行なうプレゼンテーションでした。実際に子ども登山をやっている大蔵会員に同行いただき、二次審査に臨みました。パソコンを使ってのしどろもどろのプレゼンで、最悪の結果でした。審査に通ったのは、公益法人という冠が大きかったこと、実際のコストの数分の一という低コスト（ボランティア中心なので当然ですが）にあったのではないかと考えています。

●半年間の制作時間

内定があったのは、4月でしたが、助成金額886万1000円が確定したのは5月中旬でした。5月23日に関係者による第1回の会議を開き、「家族登山普及ワーキンググループ」が発足しました。元会報編集長で『山と渓谷』編集長だった神長会員に制作チームのリーダーをお願いし、千葉支部事務局長になるという谷内剛会員に事務局をお願いしました。そして制作チームとして、YOUTH CLUBなどからワーキンググループのスタッフをお願いしました（伊藤、大蔵、波多野、松原各会員、のちに小泉、関野会員）。

通常総会の支部長会議でようやく支部長に原稿依頼をし、見本や詳細を支部に発送できたのは、7月中旬近くになっていました。

本来は4月1日から着手し、翌年1月末に完成すると決められていましたが、半年でサイトを完成させるというハードな作業となりました。支部への原稿の依頼も、三百名山の取材と重なり、無理を強いるお願いだったと反省しています。また、スタッフも昼間は仕事を持っており、かなりの負担だったかと思います。最後は正月返上で原稿を書く有様でした。

「子どもゆめ基金」では、6割を外注費に充当できることになっていました。そのため社長が山好きで、官公庁や子ども対象の制作を行なっているウェイズという制作会社に依頼しました。原稿は遅れた上に不完全であり、さらに膨大なイラストや写真を多用し、時間面でも金銭面でも迷惑をかけてしまいました。なおかつ内容的に多くの助力をいただき、大変お世話になってしまいました。

●全国32の登山コースがメイン

ファミリー登山の普及とは、子どもたちに山に親しんでもらいたいということです。山に興味を持って、山を好きになってほしいということです。また、父母や保護者の皆さんには安心して、安全に子どもを山に連れて行けるようにすることです。

そのため、単なる紹介や啓蒙書にならないように、内容や表現を工夫し、作成しました。

次ページの図は構成と内容を示したものです。

大きく6つのブロックに分かれています。

メインは「登山おすすめコース」で、全支部から1山ずつ、全国32山のおすすめコースが地図と写真入りで紹介されています。加えてそれぞれに「クイズ」や「知識」があり、また、子ども向けの「登山届け」がPDFで出力できるようになっています。山を予習することで、山に興味を持って接してもらい、下山後も思い出が残るよう作りました。

「山の学校」は、当会で行なわれている北海道支部の「自然児教室」や栃木支部の「親子登山教室」など子ども対象の登山教室を紹介しています。今後、このサイトを通じての広報活動やアピールなどが可能になります。

「家族でハイキング」では、ファミリー登山の実例として、6組の家族に登場していただきました。具体的な事例を通して、ファミリー登山の素晴らしさを知ってもらおうというものです。

「山を知ろう」は、ファミリー登山のノウハウや安全登山への啓蒙をはじめ、地図の読み方や天気の見方、登山計画の立て方などを掲載しています。親が読んでも子どもが読んでもよいように作っています。

「山はおもしろい」では、「山の妖怪事典」や山の本の紹介、山のクイズ、山ごはんなど、山に興味を持ってもらうことを多数準備しました。これも親子で読んで楽しめるものにしました。

最後の「山のお知らせ」は、これ

から行なわれる登山教室やイベントなどの募集ページです。これまで、当会を含め親子登山のための媒体がなかったため、広報する場所がありませんでしたが、有効に機能できればと、期待しています。

●次年度のサイト

「子どもゆめ基金」の助成は最長5年間の継続が可能です（継続した団体はない）。また継続しないと意味がありません。そのため、昨年末に申請書を提出し、第一次審査をパス、2月20日にプレゼンテーションを済ませました。

次年度の目標は、サイト「親子で楽しむ山登り」を拡充することです。目玉は2つ。ひとつは、支部にお願いした親子の登山コースを全国100コースにすること。もうひとつはスマートフォンのようなモバイル端末を利用することで、山中でも使える「安全手帳」というページを掲載することです。

まだ今の段階では助成は決定していませんが、通らなくてもこの事業は続けていきたいと考えています。また、支部においてもこのサイトを活用して、未来のために親子登山教室を始めていただきたく考えております。

mountaneering in himalaya

アウトライアー東峰　初登頂を振り返る

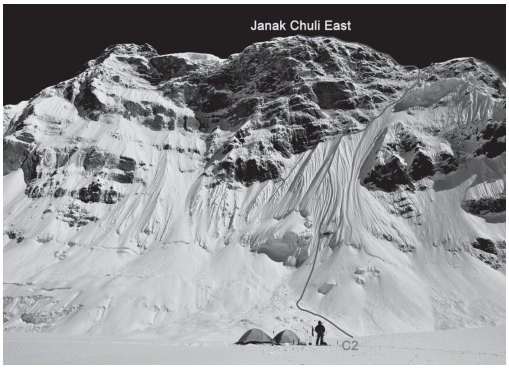
萩原浩司

2013年10月11日、青山学院大学山岳部パーティは、ネパール・ヒマラヤのアウトライアー（ジャナク・チュリ）東峰の初登頂に成功しました。アウトライアーはネパールと中国との国境に位置する標高7090mの峻峰で、そのユニークな山名は「探検登山の陰の巨人」とうたわれた英国の探検家、アレクサンダー・ケラスによって命名されています。

1911年、ケラスはジョンサン・ピークの周回を試みた際に、行く手をさえぎるかのようにそびえ立つ山を前にして引き返し、登る対象外という意味を込めて英語のOutlier（「外れ値」や「局外者」の意味）と名づけたと伝えられています。

この山の登山の歴史は比較的浅く、ネパール政府がジャナク・チュリの山名で登山を解禁したのは2002年のことでした。以来、04年にルーマニア隊が、05年にスロベニア隊が、それぞれ南西面から登頂を試みたものの、いずれも敗退。06年に再来したアンドレイ・シュトレムフェリとロック・ザロカルのスロベニア隊が南西ピラーをたどって本峰（西峰）の初登頂に成功しましたが、東峰へのルートはその後、挑む者もなく、未踏のまま残されていました。

そこで、かねてよりこの地域を研究していた青山学院大学山岳部は、アウトライアー東峰の初登頂を目指して10年秋に登山隊を送り込みました。このときは南西壁の6700m地点まで達したものの、不安定な雪壁に阻まれて登頂を断念。今回の登山隊は、そのリベンジを目的に再結成されたものです。



C2から見た南西壁と登攀ルート

第2次登山隊は、山岳部OB会会長の萩原浩司を総隊長に、山岳部監督の村上正幸、山岳部コーチの古城海太、現役部員からは4年生で主将の本田優城、2年生の真下孝典、1年生の中西謙の計6名が参加。第1次遠征に続いて参加するのは村上と本田の2名です。

頂上への道

9月8日に日本を出国した本隊を追って、後発隊はカトマンズからヘリコプターを使って空路で入山。標高約3600mのグンサで18日に全隊員が揃い、ベースキャンプを目指しました。

アプローチはカンチェンジュンガ北面BCへのトレッキングコースをローナクまでたどり、そこからブロークン氷河へと分け入ります。この氷河の入り口は高差200m近い絶壁に囲まれたゴルジュ帯となっていて、ベースキャンプまでの荷揚げには苦労させられました。

3年前と同じ氷河右岸の台地、標高5200m地点にベースキャンプを設営して本格的な登山活動に入ったのは9月24日のことです。ここから上部キャンプに向けて荷揚げと高所順応を繰り返します。

10月5日にはブロークン氷河源頭の雪原上にキャンプ2（標高5800m）を設け、南西壁の登攀準備完了。

そして、3日間の悪天候をやり過ごした後の10月9日、体調のすぐれない古城隊員と、最初から南西壁取付までと行動を制限していた1・2年生を残し、萩原・村上・本田の3名が、ネパール人スタッフとともに登頂を目指しました。

南西壁の出だしは傾斜50～60度の雪壁です。ヒマラヤ襞の溝から尾根状の斜面へと這い上がり、岩と雪とのコンタクトラインに沿って右上。比較的傾斜の緩い懸垂氷河の上部雪壁を切り崩してC3を設営しました。

10月10日、頂上を目指して6時に出発。頭上にそびえる上部ミックス壁は南西壁の核心部で、前回、越えることのできなかったポイントです。今回は幸いに雪質が安定しており、氷の層にアックスが気持ちよく決まります。薄い酸素に

あえぎつつ、チムニー状の岩場を2時間近くかけて攻略し、傾斜の緩んだ雪壁を登りつめると中国との国境稜線に飛び出しました。

その先は雪の斜面をのんびり歩いて登頂！　のつもりでしたが、そう簡単に登らせてくれないのが未踏峰。

南西壁に沿って岩混じりのやせ尾根が延びていて、全員が安全に登降するにはロープが足りません。加えてチベット側からの烈風が登高を困難にさせていて、残念ながらこの日は稜線途中で撤退。翌日の晴天を願ってC3へと一度帰還しました。

10月11日、快晴。固定ロープを使い、前日とは比較にならないくらい楽に国境稜線へ登りました。前日、苦しめられた烈風も影をひそめ、絶好の登頂日和です。

南西壁中間付近を登る萩原。眼下に小さくC2が見える

懸案だった頂上直下の岩場もスムーズにルート工作が進み、12時30分に登頂成功。東にはエベレストをはじめとする8000m級の山々が、振り返ればカンチェンジュンガの巨体が、そして北に目をやればチベット高原が、地球の弧を描いて遠くはるかに続いていました。

少し遅れて本田、村上が続き、青山学院大学山岳部にとって宿願の初登頂となりました。

遠征を振り返って

今回の遠征は、幾多の幸運に支えられたものでした。

そのひとつは天候です。昨年のネパールは梅雨明けが異常に遅く、私たちの登山期間中はずっと梅雨の周期内でした。そのなかで頂上アタックの4日間だけは連続した晴天に恵まれ、登頂日には風も止むといった、まさに理想のめぐり合わせになったことが登頂成功の一番の要因だったといえるでしょう。

登頂翌日から季節外れの大雪に襲われ、BCに3日間閉じ込められたことを振り返ってみても、悪天の周期がほんの少しズレてしまっていたら、登頂はおろか南西壁に永遠に閉じ込められていたかもしれません。ヒマラヤでは天気という不確定要素がいかに登頂の成否を左右するかということを実感した登山でした。

アウトライアー東峰山頂にて（左から村上、本田、萩原）

成功の要因としてもうひとつ挙げられるのは、大学山岳部という単一組織による遠征だったということです。OBと現役、3人ずつのメンバー構成は実にまとまりよく、お互いを尊重し合いながら遠征を楽しんでいました。

登頂メンバーの本田隊員は、前回の遠征でBCにも上がらせてもらえずローナクで引き返した悔しさを登頂という形で果たすことができ、4月に入部したばかりの1年生中西は、古城コーチや2年生真下のリードの下、高所に順応してBC裏手にそびえる6018mの無名峰に登頂できました。

そしてなにより、ネパールの東の外れの知られざる未踏峰、アウトライアー東峰に着目し、偵察隊と第1次登山隊を率いてくださった岩井胤夫、土田紘介OBの慧眼と調査の努力も忘れてはなりません。

こうした意味において、山の知識や経験を、世代を超えて伝え、吸収し、成長してゆく大学山岳部の組織登山の良さが現われた山登りだったと実感しています。

今回、登頂メンバーに加われなかった真下・中西の現役部員は、この2月にネパールを再訪し、自分たちの山を探求しています。次世代へとつながる海外登山を皆で創り上げたという点で、今回は初登頂という記録だけでなく、より大きな成果を部に残すことができたと、強く感じている次第です。

Hüttenkette

札幌周辺の山小屋 ―山は厳父 小屋は慈母―

在田一則（北海道大学山スキー部ＯＢ）

札幌西方には標高１０００～１５００ｍの山々が連なる。豊かな森林に恵まれ、なだらかな山容と長い積雪期間は山スキーに最適である。この地にかつて「Hüttenkette（山小屋の鎖）」構想の基に約23棟もの山小屋が造られた。山小屋は札幌市民に親しまれ、日本におけるスキーの発展と普及に大きく貢献した。現在も９棟が健在であり、そのうち北海道大学所有の５棟は山関係の３クラブが管理している。「山は厳父 小屋は慈母」は北海道大学スキー部が１９３３（昭和８）年に発行した「札幌附近のスキーコース圖（第４版）」（１／５万）に書かれたモットーである。この地図には13棟の山小屋が載っている。

北大の山小屋の歴史とその周辺のスキーツアーコースを簡単に紹介する。

札幌周辺の山小屋

	小屋名	建設年	現所有者	宿泊人数
1	手稲パラダイスヒュッテ	1926（大正15）年	北海道大学	30
2	ヘルヴェチア ヒュッテ	1927（昭和2）年	北海道大学	12
3	空沼小屋	1928（昭和3）年	北海道大学	30
4	奥手稲山の家	1930（昭和5）年	北海道大学	40
5	無意根小屋	1931（昭和6）年	北海道大学	30
6	冷水小屋（新）	1952（昭和27）年	北海学園大学	30
7	中山ヒュッテ	1952（昭和27）年	北海学園大学	30
8	銀嶺荘	1960（昭和35）年	北海道東海大学	50
9	万計山荘	1965（昭和40）年	石狩森林管理局	20

連絡先および利用期間

1～5：北大学務部学生支援課　011-706-7456、年中（土・日のみ）

6：北海学園大学学生部学生課　011-841-1161、1/1～10/31の日曜・祝日およびその前日

7：北海学園大学学生部学生課　011-841-1161、6/1-10/31の日曜・祝日およびその前日

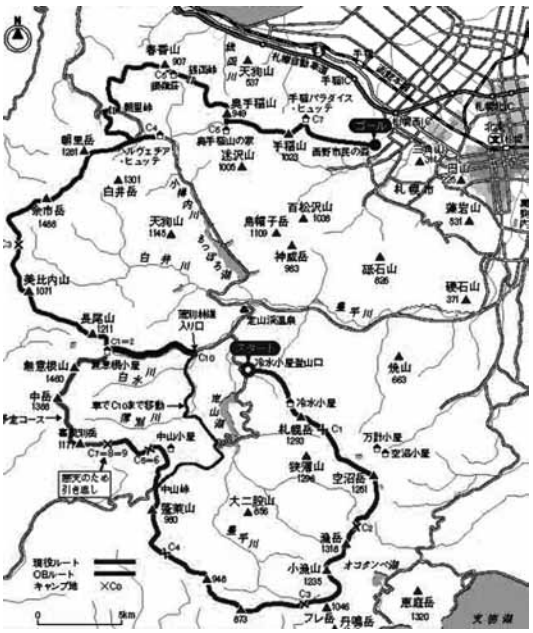
8：東海大学札幌事務課　011-571-5111、年中（管理人在住）

9：万計山荘友の会　090-5220-7446、年中

多くの山小屋を造ったHüttenkette構想

昭和初期の数年間で建設された北大の山小屋の誕生には、３人の日本人と３人のスイス人、それに北大スキー部（現在の北大競技スキー部・山スキー部の前身）や山岳部（１９２６年にスキー部から分離）のＯＢ・部員の大きな貢献があった。

北大のスキーの歴史は、レルヒ少佐が赤倉で行なったスキー講習の３年前の08（明治41）年に、予科ドイツ語教師として赴任したコラー先生が講義で学生にスキーというものを教えたことに始まる。12年にスキー部が創立され、20年代初めには、医学部教授の大野精七先生や山崎春雄先生、札幌で亡くなったコラー先生の後任のスイス山岳会員のグブラー先生、そしてコラー先生の義兄である建築家ヒンデル氏が札幌で暮らしていた。先生たちは、ドイツ留学中に体験したHüttenleben（山小屋生活）やスキーツアーの楽しさを学生や市民に広めようと、定山渓を中心とした山々に山小屋を建て、小屋を巡るスキーツアーを楽しむというHüttenketteを構想し、スキー部や山岳部の部員たちの協力を得て実現に努力した。最初の３棟（パラダ



『岳人』2013年12月号より

イス ヒュッテ、ヘルヴェチア ヒュッテ、空沼小屋）はヒンデル氏が設計した。

28年には、秩父宮様がパラダイスとヘルヴェチアに宿泊され、先生たちやスキー・山岳部員たちの案内で山スキーやHüttenlebenを楽しまれた。宮様はHüttenkette構想に賛同され、空沼小屋を建てられた。

手稲パラダイス ヒュッテ

北大スキー部創立15周年を記念して26年に建てられたパラダイスヒュッテは、94年老朽化により倒壊し、同年12月に復元再建された。

手稲ハイランドスキー場から15分ほど下った所にある。小屋には電気が来ており、水洗トイレもある。スキー場でのスキー練習の際にも活用できるほか、手稲山東の838m峰（ネオパラ）から東へ沢筋に沿って西野市民の森へ下るコースは、手軽に深雪スキーを楽しめる。かつては小屋から南西方向へ961m峰を目指して尾根に上がり、奥手稲山の家に行くコースがよく使われたが、最近はブッシュが多くなった。

奥手稲山の家

旧国鉄が冬の営業小屋として建設した小屋で、71年に北大に譲渡された。小屋へは、ヘルヴェチアヒュッテ付近から林道をたどる奥手稲の沢コース、旧手稲鉱山跡から星置川沿いの林道を進み、途中から左岸に取り付き、668m峰を目指し、さらに奥手稲山北側の856m峰を経由する手稲鉱山コースなどがある。下りは668m峰から北へ尾根沿いに（銭函）天狗山を経由して銭函に下る銭天コースもある。小屋周辺は〝ユートピア〟と呼ばれ、タンネを縫う深雪スキーの名所である。小屋からは春香山、つげ山、迷沢山などへのツアーを楽しめる。

奥手稲山の家

ヘルヴェチア ヒュッテ

定山渓奥の小樽内川左岸に佇む瀟洒なヒュッテは、かつては札幌から1日かかったが、現在はすぐ奥にできた札幌国際スキー場への道路ができたため、ここを拠点として訪れた白井岳や余市岳は日帰りが可能となり、小屋の存在意義は薄れた。

しかし、趣あるヒュッテで一夜を過ごし、スキー場から朝里峠経由で石狩湾を眺めつつ広い尾根を歩き、銀嶺荘（管理人常駐）に向かうのもよい。小屋から小樽内川をたどり、春香沢をつめると銀嶺荘に至る。また、途中から東へ向かう奥手稲の沢を行くと、奥手稲小屋に出る。しかし、ともに沢で眺望は望めない。

空沼小屋

秩父宮様のお声掛かりだけあって、最もしっかり造られているが、残念ながら万計沼畔のせいか沼側に傾き、現在は使用禁止になっている。すぐ側には、定山渓営林署が造り、現在は市民ボランティアが管理している万計山荘があり、冬も利用できる。

真駒内川の車道終点から夏道の尾根を行く。夏道は途中から万計沢川に下り対岸に渡るが、冬はそのまま尾根を行き、万計沼東の小さな沼を経て小屋に至る。春には小屋から稜線を伝い、札幌岳を経て冷水小屋に向かうのもよい。

無意根小屋

無意根小屋

北大スキー部創立20年を記念して建てられた。周辺の大斜面での豪快な深雪スキーは近郊随一。小屋から上では5月連休過ぎまで十分スキーを楽しめる。

定山渓奥の薄別から林道沿いに行く。林道終点付近の宝来監視小屋からは登山道沿いになるが、昨年スキーコース指導標が設置された。豊羽鉱山（現在閉山）の元山から千尺高地に上がり、尾根沿いに来るコースもあるが、真冬の吹きっさらしの尾根は厳しく、春山向きである。

obituary

UIAA（国際山岳連盟）元会長 イアン・マクノート・デーヴィスさん逝去

中村 保

2007年6月アルパインクラブ150周年記念（ツェルマット）
左端がマック、中央がボナッティ、その右がロッサナ・ポデスタ

「UIAA会長当時、本当にお世話になりました。英語の不得手な私に奥さんのロレートとマックは『ヤギさん、お前の言うことはちゃんと分かるよ』と言ってくれた数少ない人達でした。ここまで書いて二人を思い出して泣いてしまいました。外国の知人の死で泣いたのは初めてです。大雪の中でマックを偲びます。八木原圀明」

ご夫妻の人柄である。

マックの愛称で呼ばれたイアン・マクノート・デーヴィスが2月10日に亡くなった。享年84。マックは英国を代表する登山家であるが、一般には1980年代にBBCテレビでコンピュータ・シリーズを担当したタレントとして知られる。また、コムシェアー社（金融ソフト提供）の英国法人社長を務めた実業家でもある。何度か来日しており、日本ビジネスは難しいと述懐していた。登山歴では56年に伝説のクライマー、ジョー・ブラウンとカラコラムの峻峰ムスターグ・タワー7276mを初登頂している。異色はパリのエッフェル塔の登攀（ABC放映）であり、66年にスコットランドの高さ137mの砂岩の海食柱「ホイ島の老人」をクリス・ボニントン、ドゥガール・ハストン、ジョー・ブラウン、マックらが3つのルートから登った。

登山界での貢献は大きい。91～94年に英国登山評議会（BMC）、1995～2004年にUIAAの会長を歴任した。「チロル宣言」などUIAAの活動が最も成果を上げた時期である。マックの手腕によるところが大きい。UIAAの関係で日本のメンバーである日本山岳協会会長である、神崎忠男さんと、ほかの皆さんとの交流を重ねた。知日派の所以である。07年の松本UIAA総会の開催に尽力してくれた。

私が初めてマックと接したのは00年のUIAAアリゾナ総会のときで、その後いろいろなイベントで親交を深めた。03年2月にヒマラヤンクラブ創立75年祝賀に出かけた折、ニューデリーから夜行列車でマック夫妻とナンダ・デヴィーに近いリゾートに行ったのが記憶に鮮やかである。登山社交界の花形であるチリで美人ナンバー1のロレートさんはいつも楽しく朗らかである。道々の話の中で一つ驚いたことがある。

「ところでトム、日本山岳会と日本山岳協会はどこが違うのか」と訊かれ一瞬唖然としたが、翻ってみれば知日派のマックにしてもその程度の認識なのかと考えさせられた。その後海外で同じ質問をときどき受ける。日本は世界の登山界から孤立していると実感する。質問に対して「英国のアルパインクラブと英国登山評議会の関係に類似している」と答えることにしている。

04年2月のラスベガスでのアメリカ山岳会総会も印象に残る。一番手でマックがムスターグ・タワーの講演をし、二番手の私が「ヒマラヤの東」を映像で紹介した。

07年6月にツェルマットで催された英国アルパインクラブ創立150周年記念行事ではマック、故ワルテル・ボナッティ夫妻（奥さんは女優のロッサナ・ポデスタ）と歓談の機会を持てたことが思い出深い。

09年2月には私がアルパインクラブの名誉会員になったことを祝してロンドン・ケンジントンの高級住宅街の自宅に呼んでくれ、いつか南フランスの別荘に来てくれと誘ってくれた。このときがマックと会った最後になった。別荘行きも実現せず、また、「日本のアスリートの免疫不全」の状況を教えて欲しいとの宿題も果たせなくなった。八木原さんの心情がよく分かる。心温かい人だった。ご冥福をお祈りする。

himalaya mountain trip

13年秋のメラ・ピーク登山

関西学院大学山岳部ＯＢ　南井英弘

10年ほど前から登頂できそうな6000m峰で景観も楽しめると気付いていたが、ルクラ飛行場からキャラバン2日目に4610mのザトルワ・ラ(峠)を越えることが可能か思案し躊躇していた。近年、国内外でメラ・ピークの公募広告を見かけるので現地で調べたところ、峠の手前、4000m辺りにバッティ(茶店)が開業しているとの情報を得た。それで意を強くして単独で出かけることにした。

この秋、ネパール・ヒマラヤ東部は1952年来の悪天候が続いた。入山以来毎日、雨または雪。キャラバン開始後12日目、カレー・キャンプ（5045m）からメラ・ラベース・キャンプ（5350m）に入った日もときどき雪だった。幸いその夜半から快晴になった。

10月8日ハイ・キャンプ（5780m）を設営。翌9日、未明（2時30分）にアタックに出発。メラ氷河の広大な雪原状の緩斜面を登る。新雪の深い所は腰、弱い風が吹いていたので平均して膝上くらいまでのラッセルあり。夜明けには東の空高くカンチェンジュンガ山群が見え始め、背後にはチョー・オユー、ギャチュンカン、プモリ、ヌプツェ、エベレスト、ローツェ、マカルーといった巨峰が屏風のように突っ立ち、バルンツェ、チャムラン、カンテガ、アマダブラム、クスム・カングル、キャシャールなど尖った鋭鋒群も目前にそびえている。凄い景観だ！

一番にハイ・キャンプを出発したが、追いついてきた外国隊の連中と前後しながら登った。最終的に頂上目前に迫ったときには外国隊はいつの間にか下山の途につき、またもや私たち（ガイド2人と小生）が最先端に立っていた。

早速、頂上直下から垂直に近い蒼氷の氷壁にフィックス・ロープを取り付け、10月9日12時ちょうど、我がガイドと共に純白の汚れなき2013年ポスト・モンスーンのメラ・ピークの頂上に立った。登頂時にわずかに強風と濃いガスが湧き上がり、山頂や尾根の風下に雪煙が舞い始めた。楽しみにしていた頂上からの展望は全く利かず、残念の極みだった。

ハイ・キャンプまで戻ったのが16時ちょうど。足腰もかなり疲れ空腹感もあった。ハイ・キャンプでザックに残った食糧を食べ、仮眠をとって翌朝にメラ・ラの前進キャンプを飛ばしてカレー・キャンプに帰るよう考えたが、ポーターが気を利かせてキャンプ道具一式をすでにカレー・キャンプまで運び下ろしたのこと。

急ぎ足で夕暮れの氷河上を下ったが、日が暮れてから、大小岩石の間を縫ってリュージュのコースのように凍りついたツルツルの急斜面を下る辺りから足腰の力がなくなってきた。一度スリップすれば大怪我間違いなし。慎重に慎重を重ねて全神経を集中し一歩一歩踏み出していた。そのうち、遠くから2つの灯りが近づいてきた。私たちのポーターが私の帰りが余りに遅いので迎えに来てくれたのだ。

とにかく、彼らに両腕を抱えられて下りたかったが、下山コースが狭いので片腕を持ってもらうぐらいだった。ほとんど休みなく歩き続けた。手ごろな岩があったので私が「1分もたれて休む（岩などに一度腰を降ろすと二度と立ち上がれないと考えていた）」と言ったら、ポーター曰く「あの窓は南井さんの部屋ですよ！」と。嬉しいことにカレー・キャンプの小屋の横まで下ってきていたのだ！　テントを張らずに小屋の一室まで借りてくれていたのだ。真夜中の24時20分だった。

10月11日、小屋を出発して下山の途に。しかし、ルクラへの復路は連日の大雨か大雪。高所ではすべてがデブリで埋まり、凸凹の雪道に変わっていた。特に往時でも1時間を要したザトルワ・ラの稜線は2mの積雪があり、デブリが4～5mに盛り上がっているところなど無限に続くように思われた。しかし、なんとか明るいうちに、往時2泊したカルカ・テン（4080m）のバッティに転がり込んだ。そしてやっとの思いで翌17日、薄暮のルクラ空港にヨタヨタの態で生還した。

（本紀行は紙面の都合上、割愛した箇所があります。詳細全文は6月に刊行予定の『山岳』第百九年に掲載します。／会報編集委員会）

西北 東南

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします）

山に遊び、酒をたしなみ五十年

菰田 快

昨年度の年次晩餐会に、入会50年にして初めて出席した。丁重な招待状と岳友・桑原勇蔵氏（会津山岳会）の誘いがなかったら、この貴重な機会を逃したことだろう。

皇太子殿下ご臨席のもと、全国各地の芳醇な銘酒に酔い、山の幸を随所に散りばめたフランス料理に舌鼓を打ちながら、何十年ぶりの旧岳友たちとの歓談、高い格調の中にも和やかな雰囲気で実に素晴らしい一夕であった。50年間出席しなかったのは大きな損失であったと今では思っている。永年会員としてこれからは年会費免除。『山岳』や『山』の無料購読とあっては誠に申し訳ない。会のお役に立つこともせず、年会費納入だけが会員資格の「証」であったものが、それも免除とあっては「日本山岳会員」として胸を張る謂れがないではないかと、前副会長の宮崎紘一氏に、お酒の勢いもあって談じたところが「それなら会費相当分を寄付するという手もありますよ」と同氏のご名答であった。これから何年生きるか神のみぞ知るだが、せめて十数年は、90歳を超えるまでは、山にも親しみたいし、美味しい酒も飲みたいしと愚考をめぐらせて、20万円也を寄付させて頂いた。高齢会員の一人として、若い会員たちの負担にならないよう、会の財務の一助になればと思った次第である。

さて、紙数が少なくなってしまったが、山好きには酒好きも多く、ネパールでキャラバンの途中、ジャール、チャン、ロキシーなど現地の地酒を楽しまれたことだろう。私もそれが好きで50年来、しばしば現地を訪れては地酒を調査してきた。その最初のころは丘陵地帯のネワール族やチベット系高地民族の家庭で盛んに酒造りが行なわれていたから、容易に酒の仕込みや醗酵中の醪を観察したり、また醗酵が終わって蒸留する現場に遭遇したりと、調査する機会が多かったものだ。

しかし、最近では酒造りをする家庭がめっきり少なくなってきた。ビールやラム酒が質量共に大きく成長し、山奥にまで流通してきた。マルファ村のリンゴ・ブランデーはローカルに留まるが、カトマンズの西郊タンコット村でブドウの栽培からワインの醸造まで、研究を重ねながら努力しているパタレバン・ワインヤードは期待の持てる存在だ。ネパールの丘陵地帯にブドウ畑が広がる日が来るかも知れない。

昔ながらの「チャン」や「ロキシー」など地酒は、観光旅行者用に生き残る道もあるだろう。

故早川瑠璃子永年会員の山岳図書が届く

吉田理一

「新潟の人は広い家に住んでいらっしゃるのでしょうから、山の本はいずれ新潟に送ります」と以前からお話されていた早川瑠璃子さん（会員番号4719番）は、身の回りを整理する間もなく昨年9月急逝されました。

夫君早川定男様と御令嬢理奈子様が故人の遺志を引き継ぎ、ダン

届いた早川さんの山の本

ボール5箱に丁寧に荷造りされ本年1月25日、新潟に向けて発送して下さいました。

早川さんは昭和33年入会の永年会員、50年を超える長い会員歴と広い交友関係もあり、著者から寄贈された署名入り本や追悼集・回想録・遺稿集・遺族会による事故報告書など、市販はされなかったと思われる書物も多数含まれていました。

また、本の間からは黒田初子、川森左智子さんからの絵葉書なども出て来て、日本女性登山史に残る方々との交友関係が深かったことも知ることができました。

長い山行歴があるにもかかわらず、早川さんご自身による文章はあまり多くはありません。

昨年12月、早川さんが所属していた緑爽会忘年会で配布された、絶筆「カナダの山旅」（俳句誌『山火』所収）、南会津山の会創立50周年記念誌「南会津」（平成20年・南会津山の会発行）の「南岳荘」、『会津の山々・尾瀬』（昭和36年・川崎隆章編・修道社）の「尾瀬大白沢山・外田代の旅」などしか見当たりません。

平成20年、私の退職記念として早川さんから色紙を頂きました。昭和61年8月12日、東京日比谷・松本楼でのエドモンド・ヒラリー卿歓迎会で書いて頂いた貴重な色紙です。早川さんは当時、海外委員会委員として歓迎会の開催のため活躍されていたようです。

「私がいなくなれば、この色紙の価値を分からない人は捨ててしまうかもしれない。今のうちに山の書物を大切にしている吉田さんに差し上げておきます」というありがたいお気持ちからでした。

私の書斎に額に入れて飾って、早川さんを偲ぶ縁としています。

今年も雨の中の慰霊と安全祈願

東九州支部

今から83年前（1930年・昭和5年8月）九重山で初めての遭難事故があった。その慰霊碑の前で、九重山をはじめ過去の多くの山での遭難者の慰霊を行なうと共に、今後の山の安全を祈るという趣旨で、「九重・山の安全を祈る日の集い」を一般参加者も対象にして、毎年8月第1日曜日に行なうこととなって今年で3回目である。

久住遭難慰霊碑（平成22年8月7日）

この行事のスタートは4年前にさかのぼる。平成22年6月、当支部会員が久住山・御池の南の丘陵の上にあった上記の古い遭難慰霊碑が倒れているのを見つけて、その大きな石碑を後日、機材を運んで修復したのがきっかけである。同年8月7日に慰霊碑修復の記念に、80年前の遭難者の慰霊の儀式を、支部会員や一般の山仲間たちも集まり、約40人で、法華院温泉のオーナーで法華院白水寺の第26代院主でもある弘蔵岳久氏の読経のもとで行なったのが始まりである。

その翌年（23年）の支部定期総会で毎年この日（8月第1日曜日）を「九重・山の安全を祈る日の集い」として支部の行事に位置づけ、法華院温泉と共催で慰霊碑前で慰霊祭と安全祈願祭を、一般参加者にも呼びかけて実施することとなった。

3回目を迎えた今年も8月4日（日）に実施。支部会員をはじめ約30名が参加して行なわれたが、実施時刻（午前11時）の碑前は風雨が強くて、少し離れた避難小屋の中での実施となり、例年どおりに弘蔵岳久氏の読経で法要が始まり、全員の焼香で安全祈願を行なった。

不思議なことに、何かの因縁でもあろうか、最初の慰霊祭から4回とも雨天で、しかも風の強い悪天候に見舞われ、碑前での実施ができずに、避難小屋で実施している。

（飯田勝之）

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

集会委員会

安比高原でスキー懇親会

平成26年1月18日(土)～20日(月)に2泊3日で岩手県八幡平市の高原の宿・安代林業センターで開催されました。ここはスキー・ゲレンデに板を履いたまま行ける宿です。

このスキー場は昭和60年に創業され、最も長いコースは全長5500mもあります。東北では山形蔵王に次ぐ2番目のロングコースを持つスキー場です。天気が良ければ姫神山や七時雨山、岩手山などの名山を望むことができます。

安比温泉「二岩畑の湯」(安代林業センター)玄関前で

ここに岩手から3名と横浜、千葉、東京、埼玉、青森の合計22名が参加されました。

18日(土)

宿舎内での懇親会受付時刻が午後4時。開始時間までフリータイムなので各自が思い思いにスキーを楽しみました。また、ここには温泉が湧いているので、夕方の宴会に備えたっぷりと温泉を堪能しました。

夕食は一般の泊まり客と一緒に食堂でとりました。銘々が好きな酒をグラスに注ぎ、集会委員会清登委員長の乾杯の音頭で始まりました。嬉しいことに幹事の計らいで生ビールがジョッキ3杯まで認められ、盛り上がりました。

二次会は幹事さんの部屋に場所を変えて始まりました。各自が飲み物を持ち寄り、差し入れのイタリア・シシリア産ワイン、そして高橋毅さん持参の青森産帆立を頂きながら、参加された方のいろいろな山行の自慢話などに花が咲き、夜が更けていきました。

19日(日)

今日は一日自由行動です。朝から天気に恵まれ、青空の下、思い思いに気力、体力、技術に合ったスキーを楽しんでおられました。皆さんお年のわりには若さあふれる滑りでした。昨今は、どこのスキー場でも見られる風景として、あまり若い人は見られず、高齢者と外国人の多いことに驚かされます。夕食後はまた幹事さんの部屋で二次会となり、ワインの栓の開け方で盛り上がりました。

20日(月)

今日は最終日なので、朝食後9時に全員玄関前に集合して記念写真撮影。その後は時間の許す限りスキーを楽しむ人、温泉を楽しむ人など、各人各様でした。昼食を皆でとり、各自それぞれに思い出を胸にスキー場を後にしました。

幹事の皆さん、楽しい思い出で作りありがとうございました。

（岩手支部・畠　登）

■お詫びと訂正

『山』2月（825）号4ページ1段目、北大山岳館の床面積「2200平方メートル」は「220平方メートル」の誤りでした。

同号8ページ4段目、「世間一般も持っていた」は「世間一般もほとんど持っていなかった。これが無謀登山という世評を招いた。」の誤りでした。

訂正してお詫びいたします。

（編集部）

支部だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

東九州支部

第2回スズタケのシカ食害調査

スズタケの枯死とシカの食害に関する調査。大分県植物研究会が県の委託を受けて実施する作業のお手伝いで、6月（2013年）に続いて2回目である。予定日は10月5日（土）とすでに4ヶ月前から決まっていた。ところが、その日は台風25号が日本の南岸をうかがっていて、数日前からの予報ではほとんど確実に雨であった。

調査を主宰する植物研究会の生野喜和人さんと電話で協議したが、ほかの行事等が重なる10月なので予定どおり小雨決行。調査地点は祖母・傾山系の本谷山西側の稜線で、昨年、県環境企画課が設置した鹿の食害調査定点観測地点。

支部からの参加者7名、研究会から8名の参加者。午前8時過ぎ、雨の降るなか、宮崎県との県境にある尾平トンネルの出口から、祖母山・傾山縦走路の尾平越へ登り始める。縦走路の稜線に出ると北からの風が強く、雨が横殴りとなるなか、調査地点へ急ぐ。

午前10時半過ぎに、尾平越から約1・9㎞、標高1400mの調査地点に着いた。ネットで囲っている、その中は笹が順調に伸びているが、囲いの外の笹は新芽部分をシカに食いちぎられていて、背丈も低く、生え方もややまばらで、その違いが歴然としている。それを数値的に記録するのがこの調査である。

まずネットの中から調査開始。横20m、奥行き15m四方のネットの中を5m四方の枡に区分し、全部で12枡。その枡の一つおきに全6枡を調査するが、枡の中をさらに50㎝四方の小枡に切って、その小枡の角にある笹の背丈を1本ずつ測る。横に張った50㎝ごとに目盛りのついた縄に沿って、7名ほどが横に並んで笹の背丈を測り、記録するという、実に根気のいる作業である。

今回2度目で要領はもうみんな頭に入っているから、最初のときより進行が早い。それに何よりも、絶えず後ろから吹き付ける冷たい風と小雨で、作業をしているうちに次第に寒くなり、みんな一刻も早く終わらせようという気持ちで一致している。

ネットの中の調査が終わったのが12時過ぎで、天気が良ければここで昼食休憩をとり、その後でネットの外を計るところだが、寒いので一気に片づけようということになる。ネットの外も同じ面積の調査であるが、笹がまばらなので調査の効率が早い。1時過ぎに終了。終わればもう、寒い所に長居は無用。みんな急ぎ足で下山開始。午後3時前にトンネル口に下山。次回、10月実施を約束して解散。調査結果は生野さんがまとめてくれることになっている。

（飯田勝之）

6月のシカ食害調査

埼玉支部

第3回「埼玉の自然を知ろう！」シンポジウムを開催

1月15日（水）夕方6時半から浦和コミュニティセンター（JR浦和駅東口）で、支部員だけでなく一般の方も交えて開催された。シンポジウムは埼玉支部自然保護委員会の活動に沿った内容となっている。以下、内容を紹介する。

1．武甲山の希少植物（中村直樹会員）

石灰岩の山として有名な武甲山には絶滅危惧種や希少種が多い。これらの貴重植物をスライドで紹介し、保護の必要を訴えた。

2．埼玉県のシカの被害調査と今後の課題（金丸一豊会員）

シカ個体数の急増による森林生態系への被害が拡大している。奥秩父の山を中心に3年間、シカ被害の状況を調査してきた。今後は調査だけではなく被害を止めるにはどうすればよいのか、近隣支部と共同で対策を提案していく必要がある。例えば猟期の問題、獲ったシカの利用・普及（例えば食肉）の問題等がある。

3．越生町大高取山の自然（高嶋徳紘会員）

昨年11月に一般の方を含めた自然観察会を実施した。大高取山は地勢条件などからタブ、ウラジロなどの暖地性植物が豊富に見られる。また、世界的にも珍しいクリッペという地層の逆転現象も観察できる。ほかにも山城跡や神社・仏閣、さらにはユズ畑・ミカン畑もあって様々なものを見ることができる。シンポジウムでは、自然観察会の当日の様子がＮＨＫにより撮影された映像で紹介された。

4．森づくり活動報告（朝日守会員、吉田寛治会員）

毎年度3回の森づくり活動を埼玉森林サポータークラブとのコラボレーションで、下草刈り、枝打ちなどの作業を行なっている。慣れない大鎌やノコギリを使った作業であるが、毎回、作業後の状態を見ると「やって良かった」と実感することができる。

作業は原則として午前中であり、午後は近所を散策するのが楽しみで、里山の良さをしみじみと味わっている。

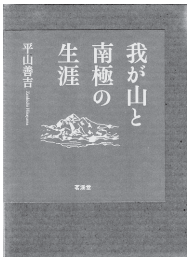
シンポジウムの内容紹介によって、埼玉支部の自然保護活動の状況を知って頂けると幸いである。

（堀川　清）

図書紹介

『我が山と南極の生涯』

平山善吉・著



2014年1月
茗渓堂刊
A5判　364ページ
定価4000円＋税

日本山岳会の会長を務めた平山善吉さんの著書は、氏の生い立ちから日本大学山岳部のエベレスト北東稜の初登攀、南極観測隊での様々な体験、日本山岳会の会長としての努力など、氏の人生を貫く未知への挑戦を振り返って、その一生を書き記した一代記である。

その間、氏の師であり、友であった人たちに対する限りなき感謝、友情をこの書から読み取ることができる。表題のとおり、氏の情熱は困難な高き山としてエベレスト、しかも極めて困難とされていたエベレスト北東稜。未知の南極への情熱は、温和に見える氏の中にかくも激しいものがあったのかと驚くばかりである。

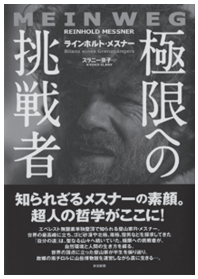
私が氏と初めて会ったのは、南極観測隊第1次隊員候補者として参加した静岡県戸田の合宿であったが、最年少であった氏が、これほどの強い信念と思いを持っているとは思えなかった。その後も日本山岳会や極地研究振興会の役員としての長いお付き合いが続いたが、常に表面では穏やかで、決して自己を表に出すことはないが、最後に意見をまとめ上げる能力は独特のものがあり、チームをまとめ上げる能力は抜群であるように思える。誰からも信頼される所以であろう。

この書の中に氏の人となりがよく現れている。

（竹内哲夫）

『極限への挑戦者』

ラインホルト・メスナー著、スラニー京子訳



2013年11月
東京新聞刊
A5判　320ページ
定価1800円＋税

原書はメスナーが還暦を過ぎた2006年にドイツで刊行された。原題は『わが道―限界挑戦者の総括』。少年期から老境に至るまでの登山家、冒険家（砂漠と極地の横断歩行）、イエティ探索者、農場主、山岳博物館の企画・経営者（原書には山間住民援助の篤志家、政治家、危機管理コンサルタント、家

庭人としての述懐もあるのだが、訳書では割愛されている）等々の人生において、そのつど語ったものを一書にまとめた本。主題は行動記録でなく、生と死の境を歩き続けた人間の思索のアンソロジー。いわばメスナーの「山のパンセ」だが、串田孫一のロマンティシズムとは全く無縁の、ことさら極限状況にはまって遊ぶ、超人的だが自分勝手な男の自己省察である。

メスナーは自分を「無用の征服者」と呼ぶ。無用の征服者は世のため人のためでなく、もっぱら自我満足行為として未知の世界に踏み入る。そのモチーフは芸術家の創作意欲に似ており、実際メスナーはしばしば自分の登山を芸術行為になぞらえ、冒険が自分探しのエゴ・トリップであることを隠さない。そんなメスナーの最高の「芸」は、たび重なる死の地帯の彷徨から生きて還ってくることである。

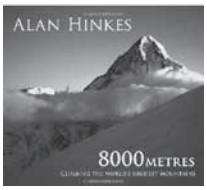
エクストリーム・アルピニズムはスポーツの範疇に入るのかどうか、私は常々考えているのだが、生還が芸になる運動はもはやスポーツではないと思う。例えば竹刀と防具で試合する剣道はスポーツであっても、命のやりとりをする真剣勝負は体育競技とは全く別物であるように。

メスナーの登山は真剣勝負である。同じように山との真剣勝負を続けた登山家はたいていどこかの時点で落命しているが、メスナーは生き続けた。とっぴな連想かもしれないが、あれだけのことをやってのけても死ななかったメスナーに、私は不敗の武芸者、宮本武蔵を想起する。六十数回の決闘に生き延びた武蔵は思索者として『五輪書』をしたためた。本書はラインホルト・メスナーの『五輪書』といえるかもしれない。武蔵が重文級の水墨画と工芸品を残したように、メスナーは精魂を込めた手づくりの山岳博物館を南チロルの城址や旧跡に創設した。武蔵が毀誉褒貶の多い武芸者であることも、名声とは裏腹にしばしば中傷の的になるメスナーを彷彿させる。

本書の構成はメスナーが語った雑誌や新聞のインタビュー記事をテーマ別（それはまた時代順でもある）に編集したもので、各章の冒頭に本人が現在の観点から解説とコメントを書いている。そういう紙誌の記事を日常的に目にする機会のない日本のメスナー・ファン（と批判者）にとって、この訳書の刊行はまたとない贈り物である。

（平井吉夫）

Alan Hinkes・著
『8000 METRES CLIMBING THE WORLD'S HIGHEST MOUNTAINS』



2013年
Cicerone Press刊
192ページ
£25

英国人初の8000m峰14座登頂者の挑戦物語だ。

初の8000m峰登頂は1987年春のシシャパンマ、ククチカが14座登頂に成功しBCで互いに祝福している。89年のマナスルは南面から。90年のチョー・オユーでは広い山頂でガスに巻かれながらも無事下山した。

91年ブロード・ピークは顧客を率いて登頂。95年K2は3度目の正直でバルトロ側からソロ、アルパイン・スタイルで登頂。96年5月、エベレストも3回目の挑戦、北稜から登頂。96年7月、GⅠに登頂した10日後にGⅡにもソロで成

図書受入報告（2014年2月）

編著者	書名	ページ／サイズ	発行元	刊行年	寄贈／購入別
黒野こうき	播隆入門：槍ケ岳を開山した念仏行者・播隆	112p／21cm	まつお出版	2014	ネットワーク播隆 寄贈
小山真人	富士山：大自然への道案内 / 岩波新書 No.1437	222p／18cm	岩波書店	2013	出版社寄贈
中村好至惠	心に映る山	113p／23cm	白山書房	2014	著者寄贈
清水敏一	松浦武四郎研究家 吉田武三私伝	119p／22cm	大雪山房	2014	著者寄贈
高橋則英（監修）	レンズが撮らえた幕末明治の富士山	205p／22cm	山川出版社	2013	出版社寄贈
駒村吉重	山靴の画文ヤ 辻まことのこと	286p／20cm	山川出版社	2013	出版社寄贈
伊藤正一	定本 黒部の山賊：アルプスの怪	223p／19cm	山と溪谷社	2014	出版社寄贈
ジャックアンドベティ山の会（編）	靴跡：ジャックアンドベティ山の会創立 20 周年記念誌	241p／30cm	ジャックアンドベティ山の会	2014	発行者寄贈
Jordans, Bart	Bhutan：A Trekker's Guide	336p／18cm	Cicerone Press	2008	購入
Beckey, Fred	Fred Beckey's 100 Favorite North American Climbs	308p／34cm	Patagonia Books	2011	購入

＊故・羽田栄治会員のご遺族様より「ヒマラヤ50峰／内田良平・著／朝日ソノラマ (2001年)」他69冊をご寄贈頂きました。ありがとうございました。
＊今澤聖氏より「山と高原」「山」「岳人」等の旧雑誌バックナンバー（当会欠号中）をご寄贈頂きました。ありがとうございました。
＊「タクラマカン周遊／金子民雄・著／山と溪谷社 (1999年)」他19冊を、昨年12月の図書交換会で購入しました。

Climbing&Medicine・61

最近の初期う蝕治療の考えと山岳環境

藤枝和夫

このコラムは「登山中の歯磨きはどうしたらよいか」(55)の続編で、的を「山行中の口腔衛生とブラッシング効果」に絞ったものです。1991年9月にイタリア・オーストリア国境のエッツタールで発見された、アイスマンとして知られる遺体「エッツイ」の口の中の状態を調べたチューリッヒ大学研究チームの記事から、不衛生な口の中で何が起こったのかを紹介します。

「エッツイ」は、イタリアの南チロル考古学博物館に保存されています。最近まで検死解剖は禁止されていましたが、2012年に初めて解凍・解剖され、149点ものサンプルが採取されました。その模様が2013年3月、「NHKスペシャル完全解凍！アイスマン ～ 5000年前の男は語る～」で放送されたので、ご覧になった方も多いでしょう。

この遺体は「推定年齢47歳。喪失歯なし。口腔状態は酷く不衛生」とされ、「炎症による支持組織の吸収」と「摩滅しう蝕が多発した臼歯」は「新石器時代における食物の変化」に基づく影響と考えられています。

パンとヤギ肉が主体の食生活が「エッツイ」にう蝕を多発させました。5300年前の「エッツイ」に「山行中でも食後のブラッシングを忘れずに」と忠告し、「う蝕と口臭の抑えに効くよ」と歯ブラシと歯磨剤を勧めたら喜ばれるでしょう。それとも、「手近に利用できる楊枝が一番。これが山男の心得」と応答するかも知れません。

歯磨剤は研磨剤と発泡剤のほかフッ素などの薬用成分を含み、薬事法で化粧品、医薬部外品、医薬品に分類されています。歯磨剤へのフッ化物配合は、先進国の9割以上で普及しています。このう蝕予防を目的とするフッ化物配合の濃度は、先進国で低く、後進諸国では高めです。

ブラッシングで歯垢を除去しますが、歯垢にはフッ素イオンを貯蔵・放出させる働きもあり、すべての歯垢を除去するのではなく制御する必要があるとの記載もあります（Pitts, N: Brit Dent J. 212,315,2012）。Pittsは、フッ化物配合歯磨剤の恩恵を受けるには過剰な水での洗口は避け、少ない水量で少数回のうがいによりフッ化物の消失を防ぐのがポイントだと述べています。

初期う蝕の治療は、従前の切削修復治療からカリエス・マネジメントの考えに移行しています。つまり、初期う蝕は脱灰と再石灰化の均衡が崩れた状態であると考え、歯質保存を第一目的とした非切削治療に向かっています。山岳環境でも、再石灰化とう蝕抵抗性のフッ化物を供給する適切なブラッシングが重要となります。

なお、過去のコラムは次の手順でご覧になれます。ご活用ください。日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→医療委員会 http://jac.or.jp/info/iinkai/iinkai.html

---

功した。

この時点で14座登頂者は4人のみ、挑戦継続を決意した。

97年、ローツェは北西面の雪のガリーからソロで登頂。98年7月、ナンガパルバットはディアミール面から登頂。AC往復に22時間を費やし、真夏にもかかわらずマイナス30度といった極寒にもてこずった。99年5月、4度目のマカルーはアルパイン・スタイルでシェルパと共に狭き頂に達した。

2002年、アンナプルナは娘の受験を前に長期にわたる高所順応は諦めて一発勝負に賭けた。一般にはカトマンズから8000m頂上まで1ヶ月のところ19日間、ソロで登頂。04年、ダウラギリではパサンとアルパイン・スタイルで寝袋なしのビバークを重ねながら、強風に雪が吹き飛ばされ岩肌ばかりの頂上に立った。05年、カンチェンジュンガは7400mでビバーク後、氷雪が剥ぎ取られた岩を登り、頂上3m手前でシッキムの人たちの聖地に敬意を表し絶頂に立った。ブリザードが荒れ狂う中、高所の影響で悲壮な感覚に襲われながらも26時間後ビバーク点に帰着し、翌日BCに生還。22年間27回の挑戦は終わった。

最初の3峰は国際隊へ参加したが、その後はリーダーやカメラマンとして招聘され、後半はほかの隊と入山料をシェアしてソロで挑戦した結果だ。山頂で娘の写真と一緒に記念写真を撮り、カンチ登頂後BCから娘に衛星電話で無事下山を知らせるなど、父親の気持ちが滲み出て羨ましい。

14峰の特徴を興味深く知ることができ、大判の写真も魅力的だ。しかし、5ヶ所で遺体を見ながら登頂しているのはやはり異常なデス・ゾーンの世界だ。**（南井英弘）**

会務報告

平成25年度第10回（2月度）理事会議事録

日時：平成26年2月12日㈬19時～21時
場所：日本山岳会集会室
【出席者】森会長、黒川・古野各副会長、高原・吉川・佐藤各常務理事、大槻・落合・勝山・川瀬・直江・野口・山田各理事、吉永監事
【欠席者】節田副会長、山賀理事、浜崎監事

【審議事項】

1・110周年記念事業推進体制について（黒川）

110周年記念事業実行委会から実施予定事業および担当者が提示され、今後、各プロジェクトリーダーの下で内容を詰めていく。〈承認〉

2・支部事業補助申請（広島支部）について（森）

標記に付き、支部活性化PT経由で申請があり、初年度分20万円を補助する。次年度以降の補助については、実績等を見て改めて検討する。〈承認〉

3・マッキンリー気象観測機材の購入資金の送金について（吉川）

一時中断していたマッキンリー気象観測を再開できることとなったので、指定寄付を受けていた気象観測機材の購入資金をアラスカ大学に送金する。〈承認〉

4・第8回日本山岳会森づくり連絡協議会開催について（高原）

第8回日本山岳会森づくり連絡協議会を、本年3月21～22日に東広島市で開催する。〈承認〉

5・入会希望者について（高原）

15人の入会希望者があった。〈承認〉

【協議事項】

1・平成26年度事業計画書・予算書骨子案について（高原・吉川）

標記に付き、別添資料の説明を受け協議し、次回理事会において審議することとした。

2・当会主催山行における山行連絡および事故連絡フローについて（川瀬）

重大事故発生時の本部への連絡方法を盛り込んだフロー図を、遭難対策委員会において作成することとなった。

3・理事職務権限規程について（吉川）

監査法人より2013年度期中往査で指摘があった、稟議書の作成・意思決定のプロセス明確化等について協議した。

4・委員会規程について（高原）

第8回（12月度）に提案した各委員会の役割について、3月の理事会で審議したい。ついては各委員会において内容、表現等について検討依頼があった（2月末まで）。

【報告事項】

1・資料映像委員会から、茨木猪之吉の絵画等の寄託先を、池田町立美術館からより活用が期待できる大町山岳博物館に変更する。（勝山）

2・寄付金・助成金受入れ事前申請2件および受入れ実績4件があった（別紙）。（吉川）

3・会計・財務の改善提案に関し、会費の銀行口座引き落とし制度の導入、年度途中入会者の年会費割引制度の導入などについて、検討の途中経過報告があった。（吉川）

4・「山の日」制定議員連盟および「山の日」制定協議会の最近の動向について報告があった。（森）

5・日本登山医学会学術集会の後援依頼があり、日本山岳会として後援する。（高原）

6・集会委員会が企画する海外登山ツアーについて、会報「山」に掲載する参加者募集原稿を修正した。（勝山）

7・海外登山助成金の募集（12月締め）について、今期は応募がなかった。次回以降の募集広報のあり方等について検討を要する。（古野）

8・岸田惠理氏（長野県信濃美術館学芸係長）から、「心に響く信州の風景画名作選」図録（1993年発行、長野県信濃美術館）に収蔵の辻村伊助、高野鷹蔵の写真作品を著作に転載したいとの許可申請があり承諾した。（高原）

9・日本山岳ガイド協会から、当会が名義後援した「百万人の山と自然　安全のための知識と技術公開講座」について、実施報告があった。（高原）

10・中国登山協会を当会が訪問することについて検討している。（高原）

11・会報「山」2月号について報告があった。（高原）

【今後の予定】

1・第2回小島烏水祭（当会主催・四国支部主管）4月13日㈰

2・第34回日本登山医学会学術集会5月31日㈯～6月1日㈰

3・日本勤労者山岳連盟第31回総会2月15日㈯～16日㈰

4・都岳連主催「高所順応研究会」2月16日㈰

平成26年度第11回（3月度）理事会案内

日時　平成26年3月12日㈬19時より

場所　日本山岳会集会室

議題　1・平成26年度事業計画書・予算書案について

2・その他

ルーム日誌 2月

1日　自然保護委員会

3日　財務委員会　総務委員会

高尾の森づくりの会

4日　図書委員会　スケッチクラブ

5日　常務理事会　集会委員会

YOUTH　CLUB

10日　YOUTH　CLUB　デジタルメディア委員会

スキークラブ

12日　理事会　山想倶楽部　休山会　スケッチクラブ

13日　フォトビデオクラブ　山岳地理クラブ

14日　自然保護委員会　公益法人運営委員会

15日　110周年記念事業PT

17日　資料映像委員会　総務委員会

18日　00会　山岳研究所運営委員会　スキークラブ

19日　三水会　青年部　つくも会

20日　フォトビデオクラブ　科学委員会　みちのり山の会

21日　山の自然学研究会

24日　YOUTH　CLUB

25日　デジタルメディア委員会

支部活性化PT

26日　自然保護委員会　麗山会

27日　緑爽会　学生部　01会　山遊会

28日　110周年記念事業PT

YOUTH　CLUB

2月来室者　458名

会員異動（2月分）

物故

鈴木淳平（4598）14・2・6

岩間弘雄（5644）14・2・22

鈴木幸雄（10971）14・2・26

原　健二（12704）13・11・11

豊倉さと子（13888）14・2・19

退会

風間満治（4590）越後

宮原弘之（7520）

加藤比呂志（9396）

宮﨑　守（10503）熊本

太田徹哉（11585）福岡

小林英雄（11726）京都・滋賀

青戸慎太郎（12793）東海

鈴木一司（13663）青森

田尾陽一（14230）

谷　勇輝（14426）関西

清原純子（14635）

INFORMATION インフォメーション

◆フィンランドとスウェーデンの最高峰登頂と驚異の海洋アルプスを訪ねる12日間

集会委員会

山行企画　日本山岳会集会委員会　旅行企画・実施　㈱フィンコーポレーション（旅行業第一種登録・登録番号一三九四号）
期間　6月25日～7月6日（12日間）
費用　64万8000円（別途燃油サーチャージ4万8000円）
定員　15名

白夜のラップランド3ヶ国を訪れます、登山を目的としたツアーで、ハイカーの憧れ「王様の散歩道」の一部も歩きます。最高峰はいずれも10時間以上の行程です。山麓のハイキング、あるいは素敵な山小屋のステイだけでも参加可能です。お問い合わせは三井まで。

TEL&FAX 03-3451-5388
携帯090-7806-7601
✉：JAC集会委員会〈syukai@jac.or.jp〉
＊詳細はツアー会社より説明があります。

◆初期山岳写真史にその名を刻む2人の偉業を紹介

東京都写真美術館（恵比寿ガーデンプレイス内）では、戦前の我が国の登山史上最も著名な登山家の一人であり、黒部渓谷の地域探査や山岳紀行文で知られる冠松次郎と、北アルプスで最初期に山小屋経営を行ない、山岳写真や槍ヶ岳を開山した播隆上人の研究でも知られる穂苅三寿雄を紹介する展覧会を3月4日から5月6日まで開催。同展は日本が世界に誇る美しい自然をテーマに、現存するオリジナルプリントや日本山岳会が所蔵する多彩な資料で、初期日本山岳写真史にその名を刻む2人の偉業を検証する。

一般　700円
問合せ　（関次和子）
TEL 03-3280-0099
✉www.syabi.com

◆2014年度登山リーダーのための救急救助講習

集会委員会

登山リーダーが救急救助に関し習得しておくべき知識、スキルおよび習得方法等について実技中心に学びます。各種グループで登山リーダーを担う方およびご関心のある方を対象とします。

日時　6月22日㈰9：00～17：00
場所　別所沼会館・埼京線中浦和駅8分
講師　恵秀彦会員（遭難対策委員会）
定員　20名
参加費　500円
申込先　集会委員会　高橋　努
TEL 090-2906-4356
✉syukai@jac.or.jp
＊参加者に詳細をご案内します。

❖編集後記❖

●「親子で楽しむ山登り」は長期展開を試みるという。親から子へ、子から孫へ登山の魅力や自然の尊さを伝えられなければ、登山文化の継承は難しい。その意味では昨今の女性登山者ブームは、心強い。子どもを産み育てる性である女性が山に目を向け、それが次世代に伝わることを期待したい。

（柏　澄子）

お詫びと訂正

「山」2月号4ページおよび1ページの目次に記した韓国山岳会・全炳九会長の氏名（カタカナ表記）に誤りがありました。正しくは「ジョン・ビョング」です。ご本人、関係の皆さまおよび会員の皆さまにお詫び申し上げ、訂正します。

萩原浩司・会報編集委員会

日本山岳会会報　山　826号

2014年（平成26年）3月20日発行
発行所　公益社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL　東京(03)3261-4433
FAX　東京(03)3261-4441
発行者　日本山岳会会長　森 武昭
編集人　柏 澄子
E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社